

甘櫛丘東麓遺跡の調査

—第177次

1 はじめに

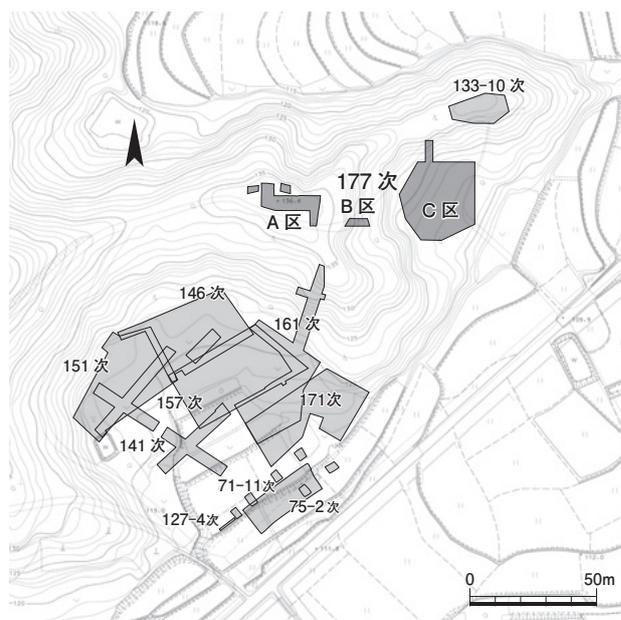
甘櫛丘は飛鳥川の西岸に位置する標高145mほどの丘陵で、多数の谷が入り込む複雑な地形を呈している。『日本書紀』には、皇極天皇3年(644)に蘇我蝦夷・入鹿親子の邸宅が甘櫛丘に営まれたことが記されている。

甘櫛丘東麓遺跡は、これまで本調査地の南に所在する南東に開く谷で、小規模なものも含め合計9回の発掘調査をおこなっている(図II-36)。第71-11次調査(1993年度)から第141次調査(2005年度)までは、国営飛鳥歴史公園甘櫛丘地区の整備にとともに、遺構の有無や状況を確認するための発掘調査を、第146次調査(2006年度)以降は、国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所の協力を得て、遺跡の内容・性格を解明するための発掘調査をおこなった。その結果、7世紀から8世紀初頭にかけて、谷を大規模に造成し、活発な土地利用をおこなっていること、尾根の中腹には柱列がめぐり、谷の奥には石垣・建物・堀などが展開するが、入口付近では工房的な施設が存在した可能性が高く、場所により土地利用の様相が異なること、などがあきらかとなっている。また、3時期の遺構変遷を把握しており、I期が7世紀前半から中頃まで、II期が7世紀後半、III期が7世紀末から8世紀初頭までにあたる。

今回の調査は、国営飛鳥歴史公園甘櫛丘地区の整備とともにのもので、A～C区の3カ所の調査区を設定した。A区は丘陵の尾根上、B区はその東に降る斜面、C区はさらに東で南東に開く谷に位置する(図II-36)。

A区・B区の調査は、2012年12月3日に開始し、2013年1月17日に終了した。いずれも、古代の明瞭な遺構は確認できなかった¹⁾。また、周辺では、第133-10次調査(2004年度)で、C区の北側の丘陵の尾根上を調査しているが、近年の重機による削平が著しく、古代に遡る遺構や遺物は確認されていない。

以下、C区の調査成果を述べる。調査区は、南北31m、東西30mで、北側の斜面地の一部に幅2.7m、長さ9mのトレンチを設定した。調査期間は、2013年1月10日から3月27日までおこない、途中約2ヵ月間の中断を経



図II-36 第177次調査区位置図 1:3000

て、2014年6月3日から再開し、12月6日に終了した。

2 調査成果

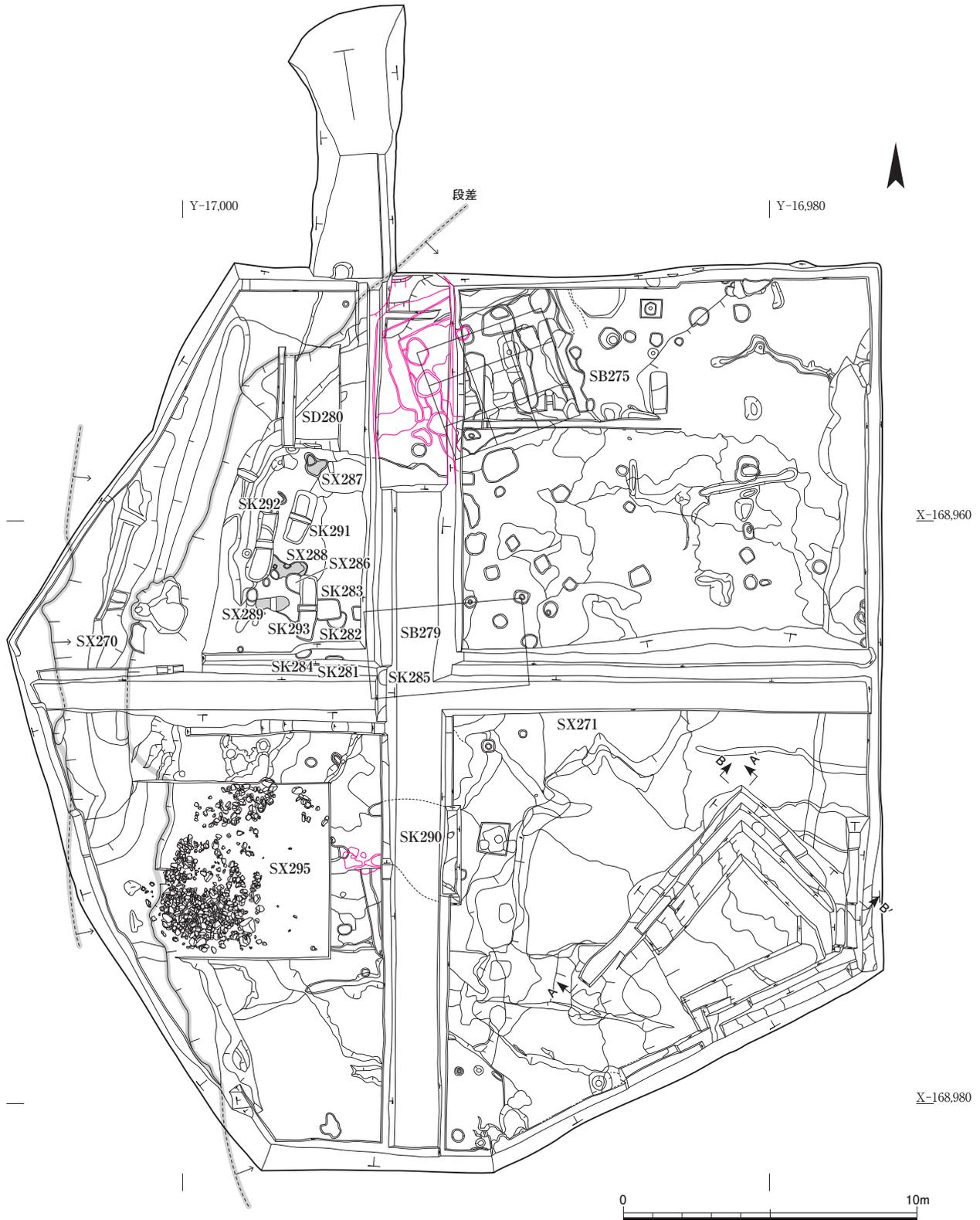
基本層序

調査地は、北西から南東に傾斜する谷地である。調査の結果、谷の斜面を切土・盛土し、平坦面を造成していたことがあきらかとなった。基本層序は、上から、表土、遺構廃絶後の堆積土、整地土、谷の埋立土、地山である。調査地南東部の3分の1ほどは、後世の土地利用によって大きく削平を受けており、すでに遺構面は失われていた。遺構は、整地土(黄褐色粘質土)、谷の埋立土、地山各上面で検出した。

地山面および谷埋立土上面の遺構

上段平坦面SX270・下段平坦面SX271 調査区西半では、斜面地を谷の地形にあわせて地山を削り、高低差約2mの上下2段の段を造り出し、それぞれ平坦面を造る。上段の平坦面SX270は、南半は幅2～3mで北に向かって広くなり、調査区北辺では幅6m以上となる。下段平坦面SX271は、切土に加え、谷の低い部分を埋め立てることによって、東西20m以上、南北30m以上の広い平坦面を造り出す。

谷の埋め立ては、埋土が厚い単位で斜めに堆積していること、途中で平坦な整地面などが確認されないことから短期間におこなわれたとみられる。埋立土は、上部は灰褐色系を中心とし、部分的に炭が混入する層もある。下層は青灰色の砂質土を中心とする。遺物は、主として土器が多く、下層からは有機物も確認された。埋立土を取り除いた谷の底面は、よくしまった明橙色土で、これ以下は遺物を含まないことから、自然堆積土であると判



図II-37 第177次調査C区遺構図 1:200

断した(図II-38・40)。なお谷底では、遺構検出面から約3.6mの深さで自然堆積土を確認したところで安全上の理由から掘削を中止し、地山は確認していない。

掘立柱建物SB275 調査区北部中央で検出した掘立柱建物。後述の素掘溝SD280の埋土を除去し底面で検出した(図II-37・39)。

東西3間、南北3間の総柱建物で、柱間寸法は約1.5m、北側と南側の1間は約1.2mである。正方位に対して、東

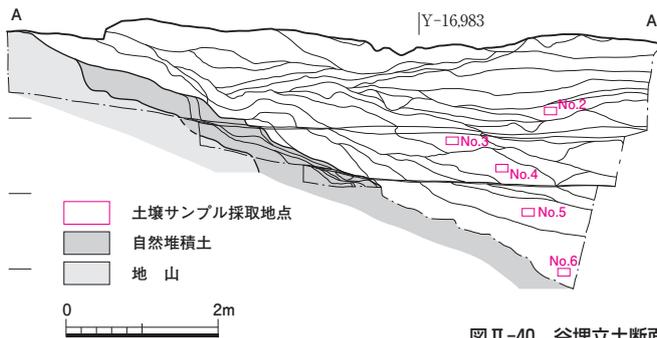
で北に振れる。柱掘方は布掘りで、柱の一部は抜き取られ、径約0.2mの柱痕跡をもつ柱穴もある。掘方は、側柱筋は南東隅とその西の柱穴の間を開き、それ以外は連続して掘る。入側柱は東西の2穴ずつを一連の布掘りとする。柱穴部分は布掘りの方向に対して長い楕円形を呈し、長径1.1~1.3m、短径0.8~1.0mである。柱穴と柱穴の間は、狭いところで幅0.4m、深さは浅いところで0.1mを測り、柱穴部分のみを深く掘り、それ以外の接続部分



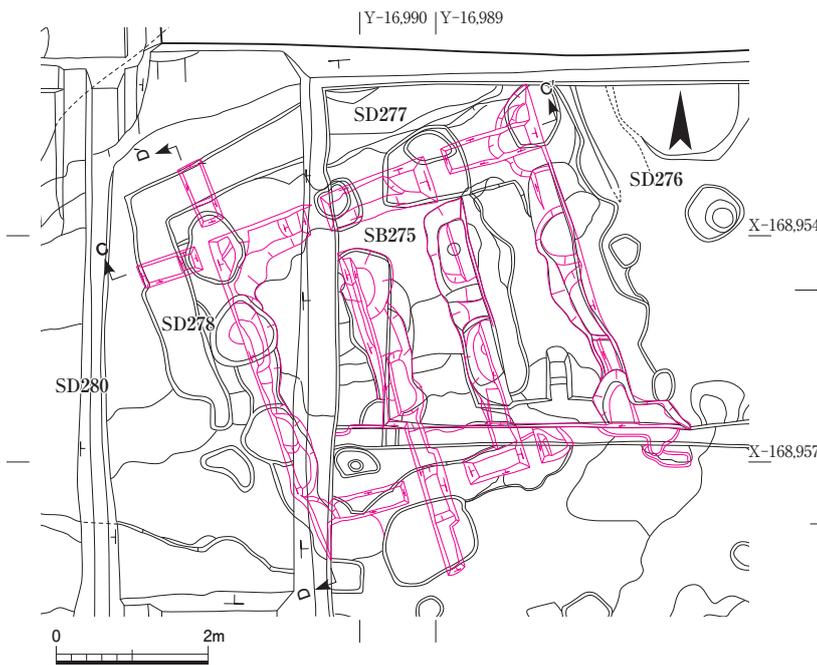
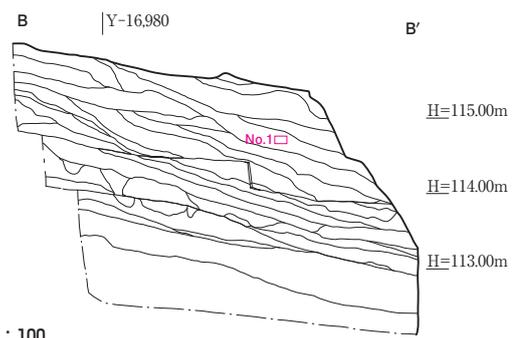
図II-38 谷埋立土堆積状況(南東から)



図II-39 建物SB275(北東から)



図II-40 谷埋立土断面図 1:100



図II-41 建物SB275遺構平面図・断面図 1:100

は狭く浅く掘る。抜取穴は平面不整形で、遺構検出面(H=117.80m)からの残存深さは0.8~1.2mと一定ではない。

側柱筋から約0.8m外側には、幅約0.7mの溝がめぐり、SB275にともなう雨落溝とみられる(図II-41)。東雨落溝SD276・北雨落溝SD277・西雨落溝SD278の3条を確認し、SD276・SD278の南半と、南雨落溝は削平されている。深さは、もっとも深いところで0.1m程度が残存するのみである。

掘立柱建物SB279 調査区中央で検出した掘立柱建物。

桁行3間、梁行2間の東西棟建物で、東で北に振れるが、SB275とは揃わない。柱穴4基を検出し、1基は断面観察用畔で確認した。柱間寸法は、桁行1.8m、梁行1.5mである。柱穴の掘方は一辺約0.5mの隅丸方形のものと、直径約0.5m程の円形のものがある。一部直径0.2mの柱痕跡をもつものもある。

素掘溝SD280 調査区西北部で検出した。切土した地山の斜面裾に沿って掘られている。南から北に延び、東に折れ溝幅が大きく広がる。東に進むにつれ溝の南肩は



図II-42 素掘溝SD280と土坑群（北から）

徐々に緩やかとなり、調査区の東半では南肩を判別し難い。溝幅は、南半の斜面裾の部分で約0.8m、溝幅を広げる部分では最大7.0mを測り、さらに広がるとみられる。掘立柱建物SB275が廃絶した後の遺構である。

土坑SK281～286 調査区中央で検出した。重複関係が認められるものもあるが、建物などとしてはまとまらない。

炭溜SX287～289 素掘溝SD280の南東で検出した（図II-42）。埋土に炭を多量に含む。被熱した状況は認められない。上記土坑群とあわせ、SD280を造る時期にその南東で何らかの土地利用があったことを示すが、用途は不明である。

下段平坦面SX271を覆う整地土上面の遺構

素掘溝SD280を埋め立て、平坦面SX271を整地する。

大土坑SK290 調査区南半で検出した。南北約3.5m、東西5.4m以上の不整形平面を呈し、深さは0.3mである。埋土はいくつかの単位に分けられ、土器を多量に含むものの、炭が混じるものなどがあるが、短期間に埋め立てられたと考えられる。整地後に周辺で不要となったものを投棄したものであろう。

土坑SK291～293 調査区西北部で検出した。南北1.4～2.0m、東西約0.8m、深さ0.4～0.5mで南北に長い長方形を呈する。

その他の遺構

石群SX295 遺構面を覆う堆積土中で確認した（図II-43）。径0.1～0.3mの石を主体とし、調査区西部で南北



図II-43 石群SX295（北東から）

約14m、東西約7mの範囲に広がる。面を揃えるなどの様子はなく、外部より投棄もしくは崩落したものであろう。調査区西側の尾根上に何らかの施設があり、それが崩壊した可能性も考えられる。（大林 潤）

3 出土遺物

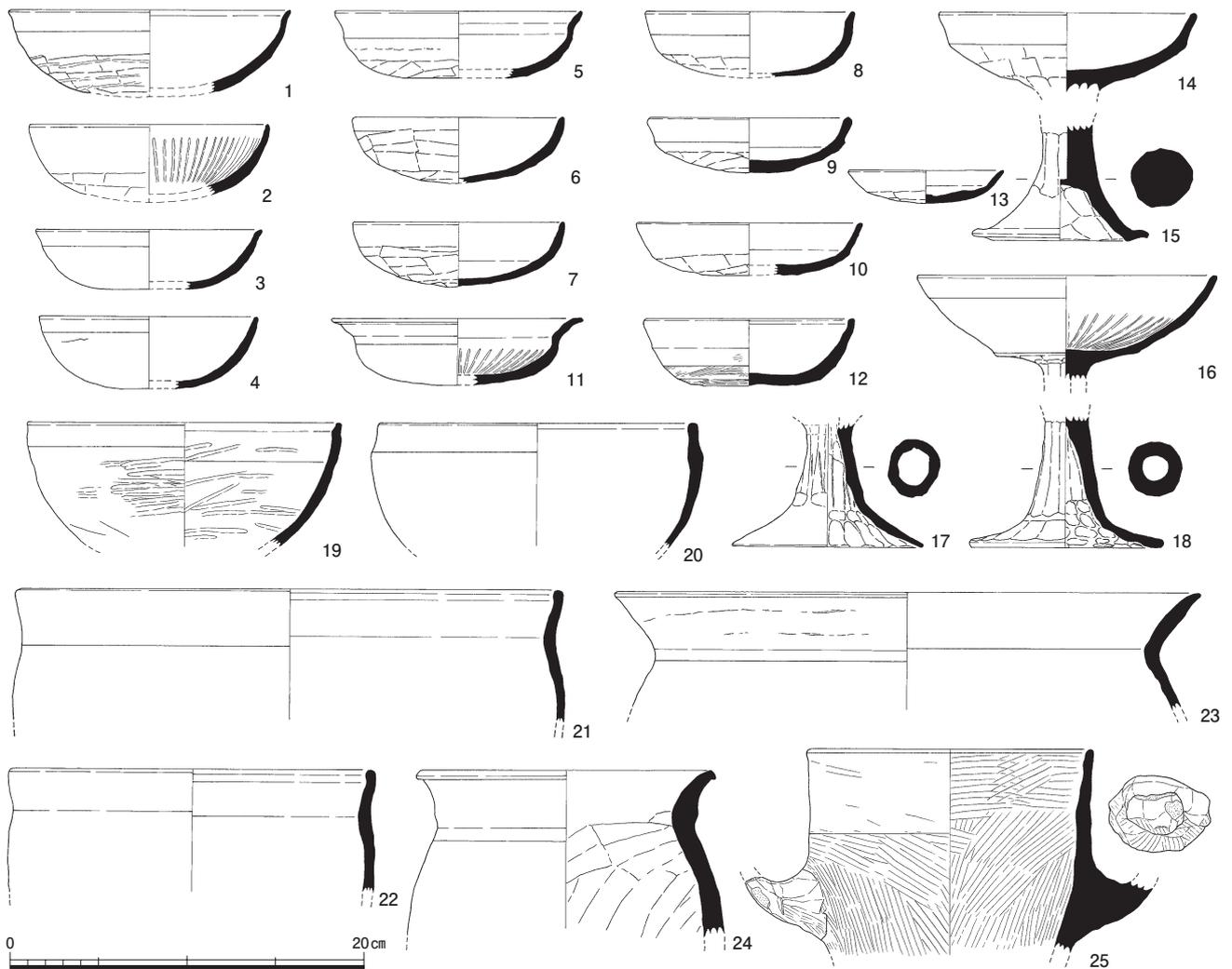
土器・土製品

今回の調査では、整理木箱31箱分の土器・土製品が出土しており、その大部分は古代の土師器・須恵器である。ここでは、下段平坦面SX271の造成に関わる、調査区東南部に広がる谷の埋立土から出土した土器群と、建物等の廃絶に関わる、掘立柱建物SB275や素掘溝SD280を覆う堆積土から出土した土器群、また石群SX295を覆う堆積土から出土した土馬について報告する。

谷埋立土出土土器 谷の埋立土から出土した土器には、土師器杯C・杯G・杯H・小皿・高杯C・高杯H・鉢・甕・甌など（図II-44）、須恵器杯H・高杯・壺・甕など（図II-45）がある。

1・2は杯C。1は口縁端部が内傾する。器面の磨減が著しく、暗文の有無は不明。b手法で調整し、底部にはヘラミガキを施した痕跡がある。2は口縁端部を丸くおさめ、内面には一段放射暗文を施す。調整はb0手法。

3・4は杯G。両者とも口縁端部を丸くおさめる。3は胎土に径1mmほどの砂粒が目立つ。4は内面にタール状の黒色付着物がみられる。



図II-44 第177次調査谷埋立土出土土師器 1:4

5～10は杯H。口径は11.2～14.0cm。器形には、口縁部の外反が強いもの(5)、口縁部と底部の境に弱い稜をもつもの(9・10)、その境が不明瞭なもの(6～8)などがある。5・8は胎土に赤色粒子を多く含む。

11・12は杯X。器形は異なるが、類例が少ないため、ここでは「杯X」と一括して報告する。11は内面に放射暗文を施し、調整はa0手法。12は平底に近く、口縁端部はわずかに内に肥厚する。底部外面にはハケ目を施す。

13は小皿。調整はb0手法。内面には広範囲に漆が附着し、パレットとして使用したことがわかる。

16～18は高杯C。16は口縁部と底部の境に稜をもち、内面には放射暗文を施す。17は脚柱部の内外面に絞り目が残る。18は脚部でほぼ完存。裾部内面には指オサエの痕跡が多くみられる。

14・15は高杯H。14は底部外面にケズリを施し、胎土に赤色粒子を多く含む。15は中実の脚部内面を円錐状に削り取る。外面は、ケズリにより面取りがなされる。

19・20は鉢。19はb手法で調整し、胴部外面にミガキを施す。20は胎土に赤色粒子が目立つ。

21～24は甕。21・22の口縁端部はわずかに内に肥厚す

る。21は胎土に赤色粒子を多く含む。23は口縁部外面に粘土接合痕が残る。胎土には雲母を多く含む。24は器壁が厚い粗製品。胴部内面はケズリ調整である。胎土には径2～3mmの砂粒を多く含む。

25は甌。胴部外面を目の粗いハケ目で調整し、内面も全面にハケ目を施す。胎土には赤色粒子と径1mmほどの砂粒を多く含む。口縁部の歪みが大きい。

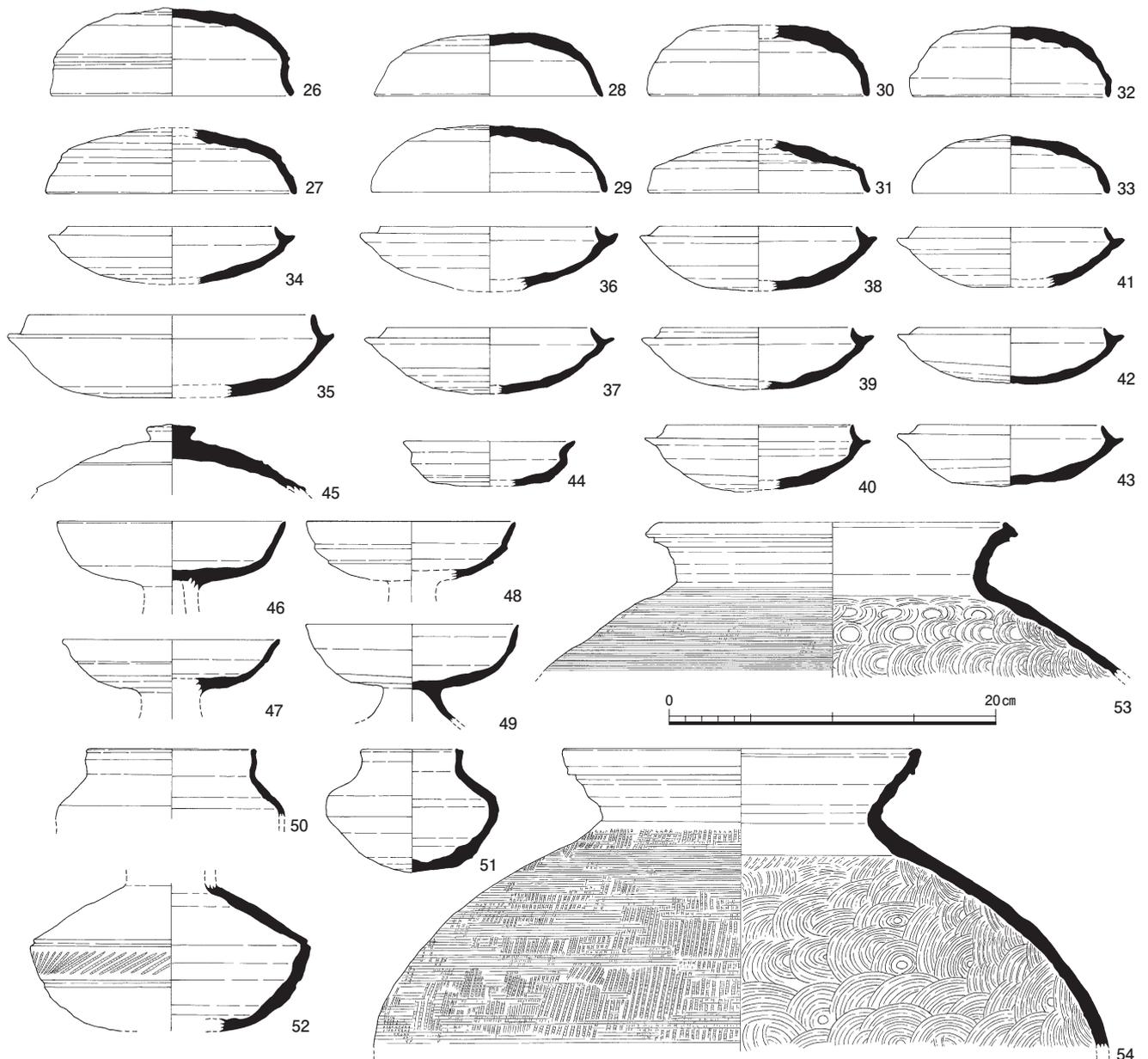
26～33は杯H蓋。口径は12.0～15.2cm。いずれも口縁端部を丸くおさめ、頂部はロクロケズリで調整する。26・27は口縁部と頂部の境に凹線が巡る。26・30は灰白色を呈す。

34～43は杯H。口径(蓋があたる部分の直径)は、35が18.6cmと大きい、他は12.6～14.2cm。いずれも口縁端部は丸くおさめる。底部の調整は、35・36はロクロナデ、それ以外はロクロケズリである。40の底部外面にはヘラ記号がみられ、38の底部外面には文様風の墨書が確認できる。

44は杯X。底部外面はヘラ切り不調整。

45は蓋。頂部外面には凹線が一条めぐる。頂部はロクロナデ調整で、焼成はやや不良。

46～49は高杯。口径は12.8～14.0cm。46は脚部に透孔



図II-45 第177次調査谷埋立土出土須恵器 1:4

があくが、49は透孔をもたない。47は口縁部外面に凹線がめぐり、48は口縁部外面に小さな段をつくる。杯底部外面は、47・49がロクロケズリ、46・48がロクロナデ。

50・51は短頸壺。50は頸部内面に絞り目が残る。51は口縁端部に面をつくる。焼成が不良で、器面の磨滅が著しい。

52は壺Kで、長い口頸部がつくと考えられる。肩部と胴部中位に凹線を入れ、その間に櫛状工具による連続刺突文を施す。

53・54は甕。53は口縁部外面に小さな段をつくり、54は玉縁状の口縁部をもつ。

堆積土出土土器 SB275やSD280を覆う堆積土からは、土師器杯C・皿・高杯・甕、須恵器杯H・杯H蓋・杯G蓋・高杯・平瓶・甕などが出土した(図II-46)。

55・56は杯C。55は一段放射暗文をもち、56は器面の磨滅が著しいが、内面に放射暗文が確認できる。

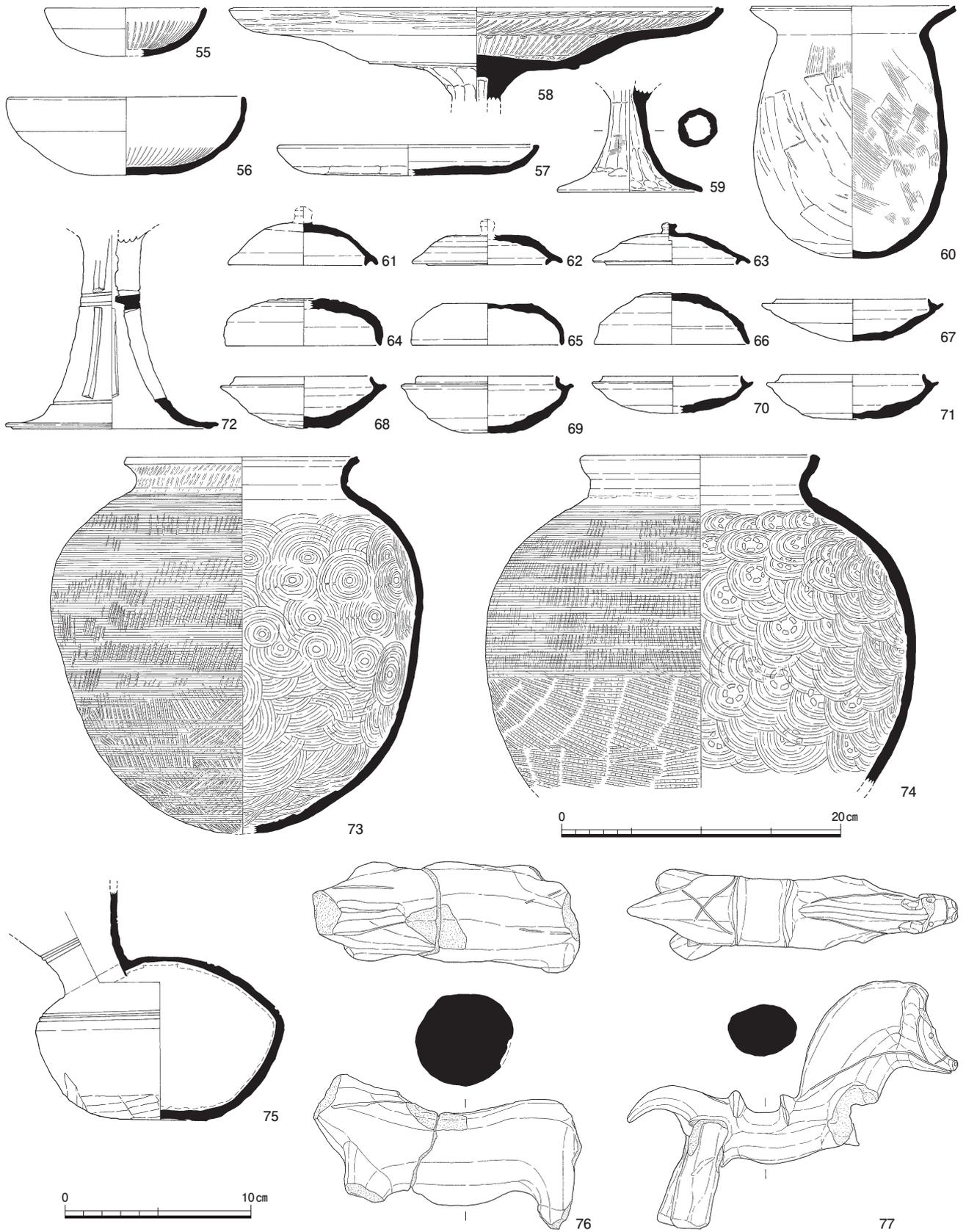
57は皿。口縁端部に面をつくる。内面の磨滅が著しく、暗文の有無は不明。b0手法で調整する。

58・59は高杯。58は大型の特異な器形で、口縁部内面に三段の放射暗文とループ暗文、底部内面に格子状暗文がみられる。口縁部外面にはヘラミガキを施す。59は脚柱部外面にハケ目状の条線が確認できる。

60は長胴甕。胴部の外面調整はハケ目ののちヘラケズリ、内面はハケ目調整である。胎土に径1mmほどの砂粒を多量に含む。

64~66は杯H蓋。口径は10.8~11.0cm。頂部は、65がロクロケズリ調整、64がヘラ切り不調整である。66は頂部にロクロケズリを施すが、中央付近にケズリはおよばない。66は頂部にヘラ記号がみられ、65の胎土には黒色粒子が多く入る。

67~71は杯H。口径(蓋があたる部分の直径)は10.9~12.1cm。底部外面は、68・69がロクロケズリ調整、67・



図II-46 第177次調査堆積土出土土器・土製品 1:4 (76・77は1:3)

70・71がヘラ切り不調整。69は外面に自然釉の降着が著しく、68の底部外面にはヘラ記号がみられる。

61～63は杯G蓋。口径（身があたる部分の直径）は、9.6～10.3cm。頂部の調整は62・63がロクロケズリ、61はロクロナデである。

72は高杯脚部。透孔は2段で3方向にあく。上下の透孔間に、2条の凹線がめぐる。

75は平瓶。口縁部以外は完存する。狭い平底で、肩の張りは弱い。底部に手持ちヘラケズリを施し、それ以外はロクロナデ調整。2条一組の凹線が、口頸部、頂部、肩部にそれぞれめぐる。頂部内面には円盤閉塞の痕跡が確認できる。灰白色を呈し、胎土に黒色粒子を含む。器形や胎土の特徴から東海地方産と考えられる。

73・74は甕。ともに短い口縁をもち、体部外面はタタキ調整ののち、カキ目を施す。74は内面の当て具が車輪文となる。また、焼成が不良で、胎土に黒色粒子を含む。

土馬 石群SX295を覆う堆積土から、残存状態が良好な土馬が出土した（76・77）。これらは、出土状況から、SX295を形成する多量の石が投棄されるのとはほぼ同時期に廃棄されたと考えられる。両者とも7世紀代の所産。

76は胴部がほぼ完存するが、それ以外を欠く。幅の狭い鬚をもち、胴部断面は円形である。

77は前脚以外が完存する。鬚は幅が広く、背中には鞍をもつ。手綱と尻繫は線刻により表現される。四肢の接合は差し込みによる。

各土器群の位置づけ 谷の埋め立ては、土層の状況から短期間におこなわれたと判断できる。そのため、谷埋立土出土の土器群にはある程度の一括性を認めうる。

谷埋立土から出土した土師器には杯Cが存在し、高杯Cの杯部が深い。須恵器では、杯Hの口径（蓋の口径または身の蓋があたる部分の直径：以下同じ）は13～14cmを中心とし、小さいもので12.0cmを測る。頂部・底部の外面は大部分がロクロケズリ調整で、ヘラ切り不調整のものはみられない。ケズリの範囲が広いものも散見する。また須恵器に杯Gは認められない。これらの特徴から、谷埋立土出土土器は、飛鳥I段階のうちでも古相に位置づけられる。古相の段階は実年代を考える資料に乏しいが、飛鳥寺下層や山田道第3次黒褐色土層出土土器よりやや新しく、7世紀初頭を中心とした年代を考えておきたい。

またこの谷埋立土出土土器は、本調査区より南の谷

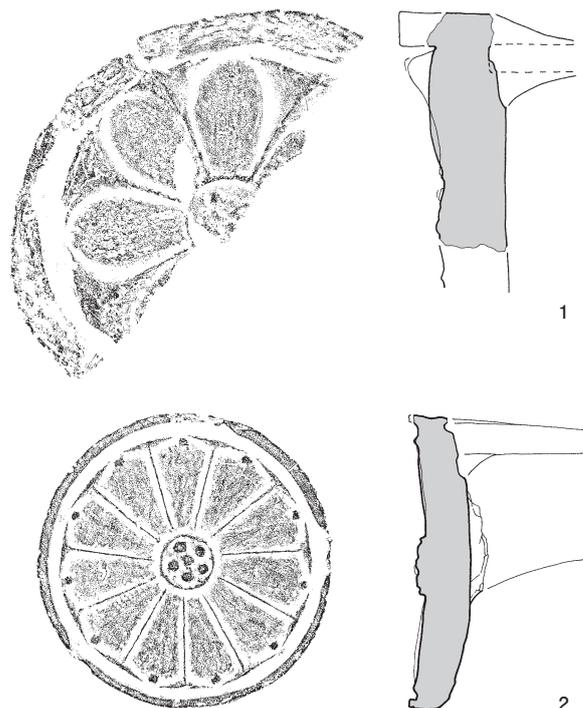
でおこなった第157次調査²⁾の石垣埋立土出土土器よりは古い様相をもつ。このことから、第157次調査の石垣SX100の造成～機能時期と本調査区での谷の埋立時期が併行関係にあると考える。

一方、SB275やSD280を覆う堆積土から出土した土器群については、土師器に皿が認められ、須恵器では杯Gが確実に存在する。須恵器杯Hの口径は11～12cmが中心で、頂部・底部がヘラ切り不調整のものがみられる。出土層位が「堆積土」という性格であるため、一括性は低い。SB275・SD280の上層から出土したこれらの土器群の様相は、下段平坦面に展開する遺構の廃絶時期を考える上でひとつの目安となる。飛鳥地域の基準資料と比較すると、山田寺下層SD619および整地層出土土器にもっとも近い。下段平坦面で検出した遺構の廃絶は、これから大きく隔たらない時期と考えられ、若干年代に幅をもたせたとしても、7世紀半ばには廃絶していたと考える。

（若杉智宏）

瓦 磚 類

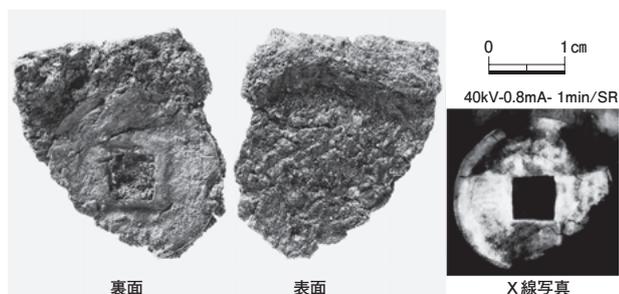
丸瓦142点（15,630g）、平瓦606点（44,630g）、軒丸瓦3点、軒平瓦1点、ヘラ描き平瓦2点、このほか壁土20点（150g）、榛原石3点（2,580g）が出土した。



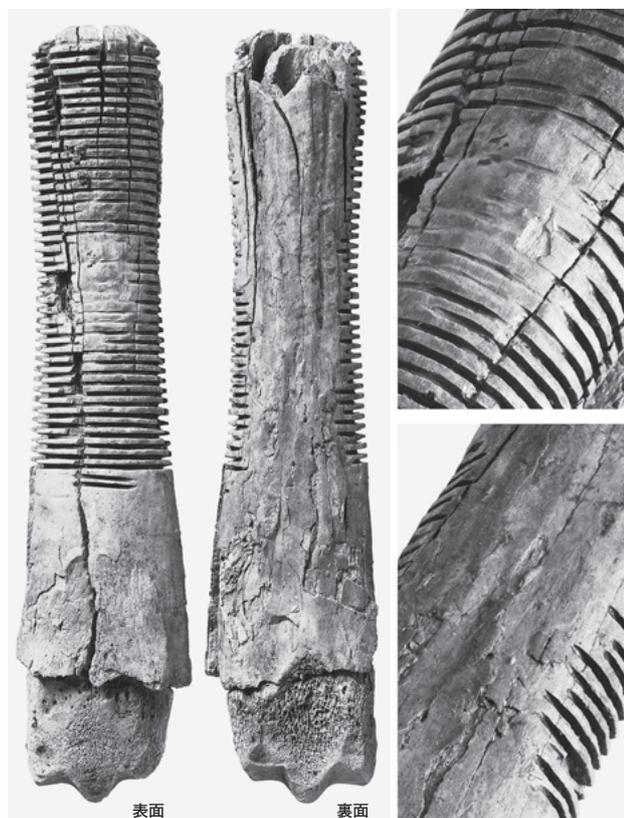
図II-47 第177次調査出土軒丸瓦 1：4

軒丸瓦 3点のうち2点を図示した(図Ⅱ-47)。1は破片であるが、直径23cm程度に復元される大型品である。素弁八弁蓮華文で中房蓮子は中央の1顆とその周囲を巡る1顆のみ残る。蓮弁と比べ間弁と外縁が非常に高く、中房は低く膨らむ。これまでの甘樫丘東麓遺跡の調査では同範品は出土していない。黒褐色を呈し焼成がやや甘く軟質である。調査区西部の石群SX295と遺構廃絶後の堆積土で出土した2点が接合した。

2は、素弁十一弁蓮華文で、中房蓮子は1+5。飛鳥寺Ⅲaと同範である。瓦当裏面は中央を中高に作り、丁寧なナデをほどこす。褐白色を呈し焼成は良好である。



図Ⅱ-48 神功開寶 1:1



右上：表面の擦痕、右下：裏面の加工痕

図Ⅱ-49 ウマ中足骨製の刻骨

大土坑SK290から出土。もう1点の軒丸瓦は単弁蓮華文と想定されるが小片であり表面が摩滅するため詳細は不明である。堆積土から出土。(清野孝之)

木製品・銭貨・骨製品ほか

木製品 調査区南東の谷埋土から加工棒や燃えさしなどが整理箱2箱分出土した。

銭貨 石群SX295を覆う堆積土から神功開寶(初鑄765年)が1点出土した(図Ⅱ-48)。脆弱なため付着土を除去できないが、X線写真によって銭文を確認できる。直径2.35cm、方孔は内寸で一辺0.60cm。

骨製品 谷埋立土下層から、刻み目をもつ骨製品が1点出土した(図Ⅱ-49)。近位端は欠損しているが、遠位端の滑車形状からウマの中足骨(右側)と同定できる。全長17.4cm、最大幅3.5cm。骨全体を平滑に加工したうえで、骨の上半部10.5cmの範囲に多条の平行沈線を施す。沈線は3面に及び、全周しない。沈線の断面形は凹状を呈し、深さ0.1~0.2cmである。平行沈線の中央部には擦痕が認められ、凹みがなくなるほど擦り減っている箇所もある。使用痕の可能性があろう。こうした刻骨は弥生時代以降にみられ³⁾、觥状の楽器あるいは祭祀品とする見解も示されているが、その機能は不明である。

鉄滓・焼土 整地土上面を覆う堆積土から鉄滓345g、焼土323gが出土した。焼土のなかには、スサ混じりのものが散見される。

4 自然科学的分析

動物遺存体

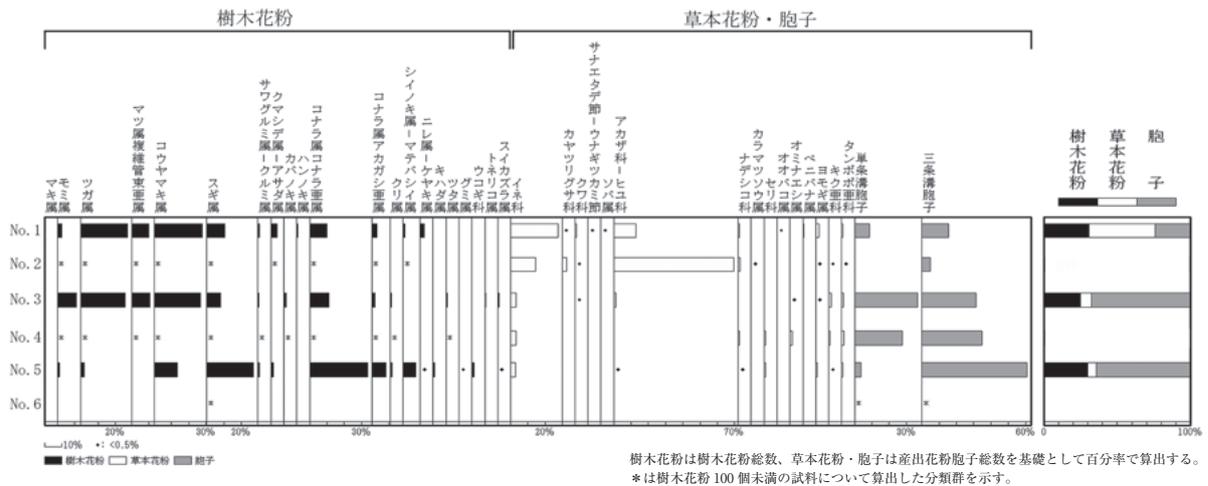
谷埋立土からはウマの大腿骨近位端、ニホンジカの大腿骨、馬歯など13点の動物骨が出土した。いずれも人為的な加工は認められない。また、大土坑SK290から種不明の焼骨片が1点出土した。

大型植物遺存体

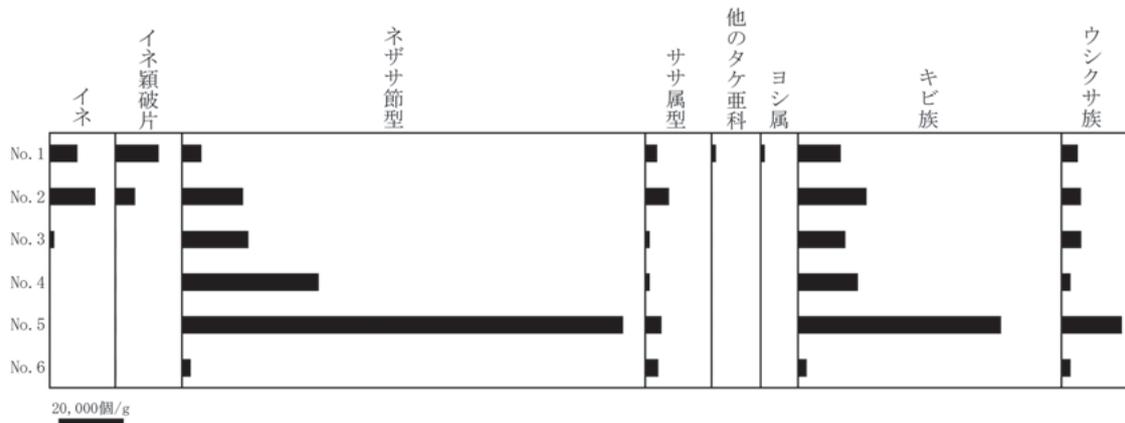
谷埋立土下層から桃核6点が出土した。また、後述する土壌サンプルの一部について、2mmおよび1mmの篩による選別をおこなった。その結果、試料No.4からヤマアイの炭化種実、試料No.5からはヤマアイとブドウ属の炭化種実をわずかに確認した。

小型植物遺存体

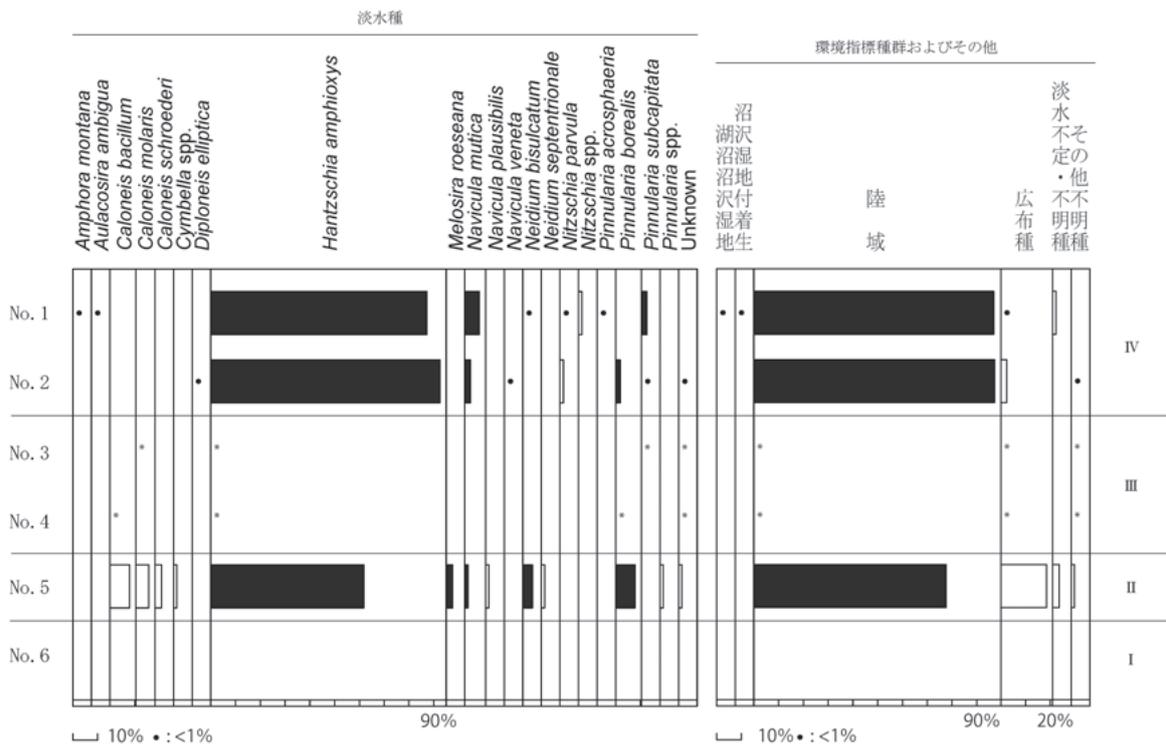
小型植物遺存体は古植生や堆積環境の復元に欠かせないものであり、本調査でもその回収と分析を実施するこ



図II-50 谷埋立土における花粉分布図



図II-51 谷埋立土における植物珪酸体分布図



図II-52 谷埋立土における珪藻化石分布図

すべての分類群を表示する。
*は50個体未満の試料について検出した分類群を示す。

ととした。小型植物遺存体は通常の発掘調査手法では回収できないので、土壌サンプルを採取して株式会社パレオ・ラボに分析を委託した。試料採取にあたっては花粉や珪藻化石が遺存している可能性が高い場所を検討し、調査区東南部の谷埋立土を選定した。具体的には、谷の北壁および東壁に6カ所の試料採取地点を設け(図Ⅱ-40)、各試料について花粉分析、プラント・オパール分析、珪藻分析を実施した。花粉分析およびプラント・オパール分析は森将志(パレオ・ラボ)が担当し、珪藻分析は藤根久(同)がおこなった。なお、各分析方法⁴⁾は詳述しないが、2012年度の第171次調査時と同じ方法である。

株式会社パレオ・ラボより提出された報告書をもとに、分布図を提示して分析結果を簡略に記しておく。ただし、今回の分析試料は谷埋立土であり人為的な影響を考慮しなければならないため、分析結果から導き出される古植生を調査区周辺のそれと断定することはできない。分析結果の解釈には慎重を期すべきであり、ここでは分析結果を提示するにとどめておきたい。

花粉分析 検出された花粉と胞子の分類群数は、樹木花粉21、草本花粉15、シダ植物胞子2の総計38である(図Ⅱ-50)。ただし、全体的に花粉化石の遺存状態が良好ではなく、試料No.2・4・6については充分な量の樹木花粉を検出できなかった。なお、試料No.1からは栽培植物のソバ属とベニバナ属がわずかに産出している。

プラント・オパール分析 7種類の機動細胞珪酸体を確認できた(図Ⅱ-51)。試料No.1・2からはイネ機動細胞珪酸体とイネ穎片が産出している。花粉分析においても、両試料ではイネ科花粉の増加が認められる。

珪藻分析 検出された珪藻化石は、淡水種20分類群11属17種である(図Ⅱ-52)。試料No.6からは珪藻化石がまったく検出されなかった。(和田一之輔)

5 まとめ

調査の結果、以下の遺構変遷が認められた。

ア：谷を切土・盛土し平坦面SX270・271を造り、掘立柱建物SB275・279を建てる。

イ：SB275が廃絶し、素掘溝SD280・土坑群などを造る。

ウ：SD280を埋め立てSX271に盛土を施し整地し、長方形土坑群が掘られる。

エ：すべての遺構が廃絶し、堆積土で覆われる。

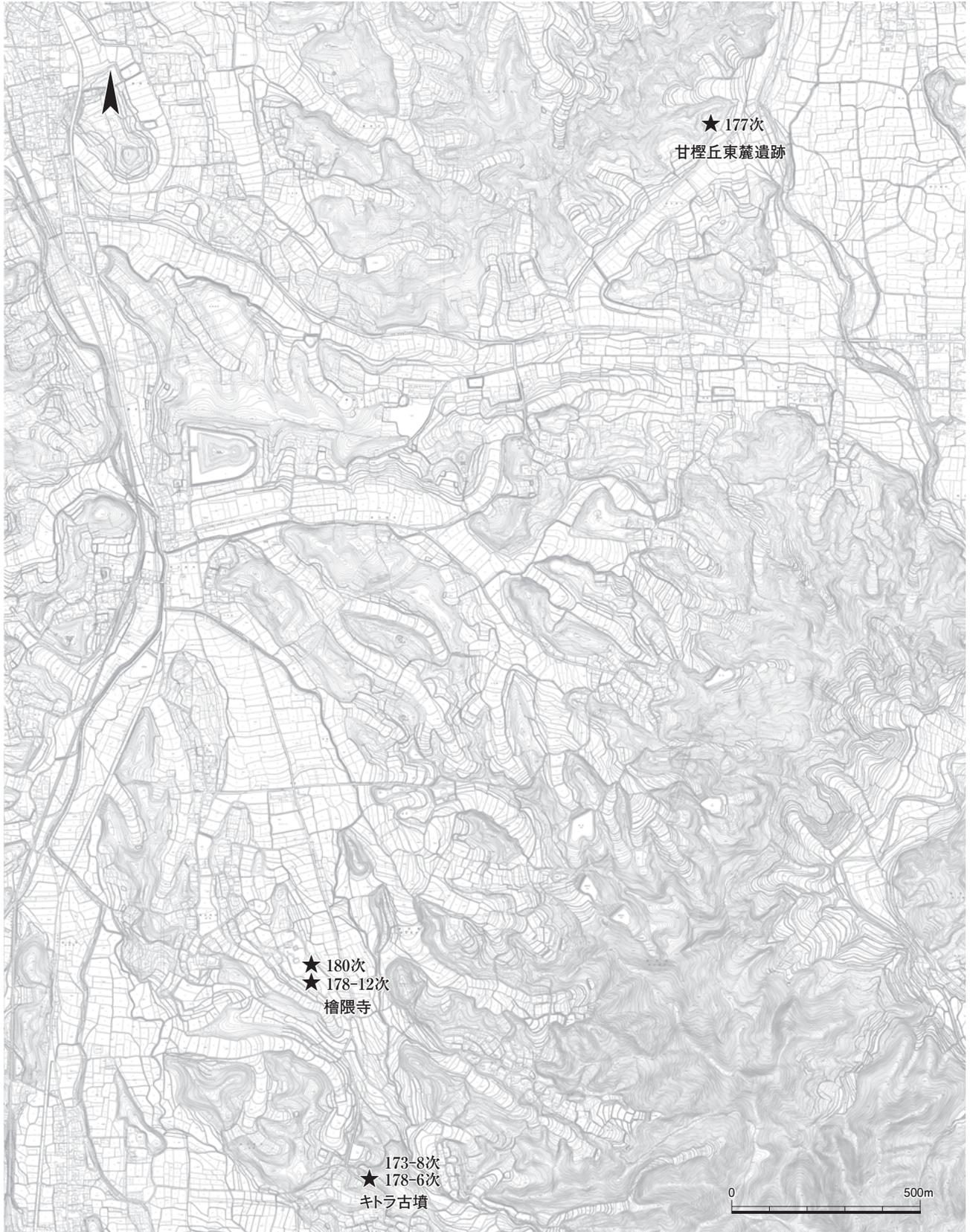
下段平坦面SX271を造る谷の埋立土からは7世紀初頭の遺物が出土していることから、アの造成は7世紀前半のうちには実施されたとみられる。一方で、エの堆積土のうち、遺構面を覆う土から出土した土器の多くは、7世紀前半～中頃に位置付けられるものであることから、ア～ウの遺構が廃絶した年代は7世紀中頃をあまり降らない頃とみられる。したがって、調査地は7世紀前半に造成された後、ある程度の期間使用され、7世紀中頃に廃絶したと考えられる。

このように、本調査地では7世紀初頭以降に谷を大規模に造成して平坦面を造り、建物を建てるなどの土地利用がおこなわれていたことがあきらかとなった。SB275は布掘掘方をもつ総柱建物で、高床の建物の可能性が考えられる。布掘掘方をもつ建物は甘樫丘東麓遺跡では初めての検出である。SB275廃絶後は、SD280とその周囲を中心に何らかの施設が造られるが、全体的に遺構が少なく、調査地の性格を特定するものはなかった。

本調査地が位置する谷は、これまで継続して調査してきた南の谷と比較して、面積が狭いが同じ様に切土・盛土などの造成をおこない、様々な施設を造り活発に利用していたことがあきらかとなった。また、本調査地の造成の年代が7世紀初頭～前半とみられることと、南の谷の造成時期が7世紀前半と推定できることから、甘樫丘東麓全体が大規模に造成・利用され始めるのは、7世紀前半であったと言えよう。その後、南の谷が7世紀中頃に埋め立てられ再利用されるのに対し、本調査地は7世紀中頃に廃絶し、以後は利用されなかったとみられる。今後周辺の遺構の広がりを調査していく中で、本調査地及び遺跡全体の性格が解明されることを期待したい。(大林)

註

- 1) 「甘樫丘東麓遺跡の調査 一第171・177次」『紀要 2013』。
- 2) 「甘樫丘東麓遺跡の調査 一第157・161次」『紀要 2010』。
- 3) 木村幾多郎「刻骨」『弥生文化の研究 8』雄山閣出版、1987。松山友子「館収蔵の刻骨」『黎明館調査研究報告』第3集、鹿児島県歴史資料センター黎明館、1989。大竹憲治「卜占に係る刻み目痕を持つ骨角製文物考」『地域と学史の考古学』杉山博久先生古稀記念論集刊行会、2009。
- 4) 森将志・藤根久「3 花粉分析」「4 プラント・オパール分析」「5 珪藻分析」『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』福岡県教育委員会2011。



図Ⅱ-53 檜隈寺周辺の地形図 1 : 15000